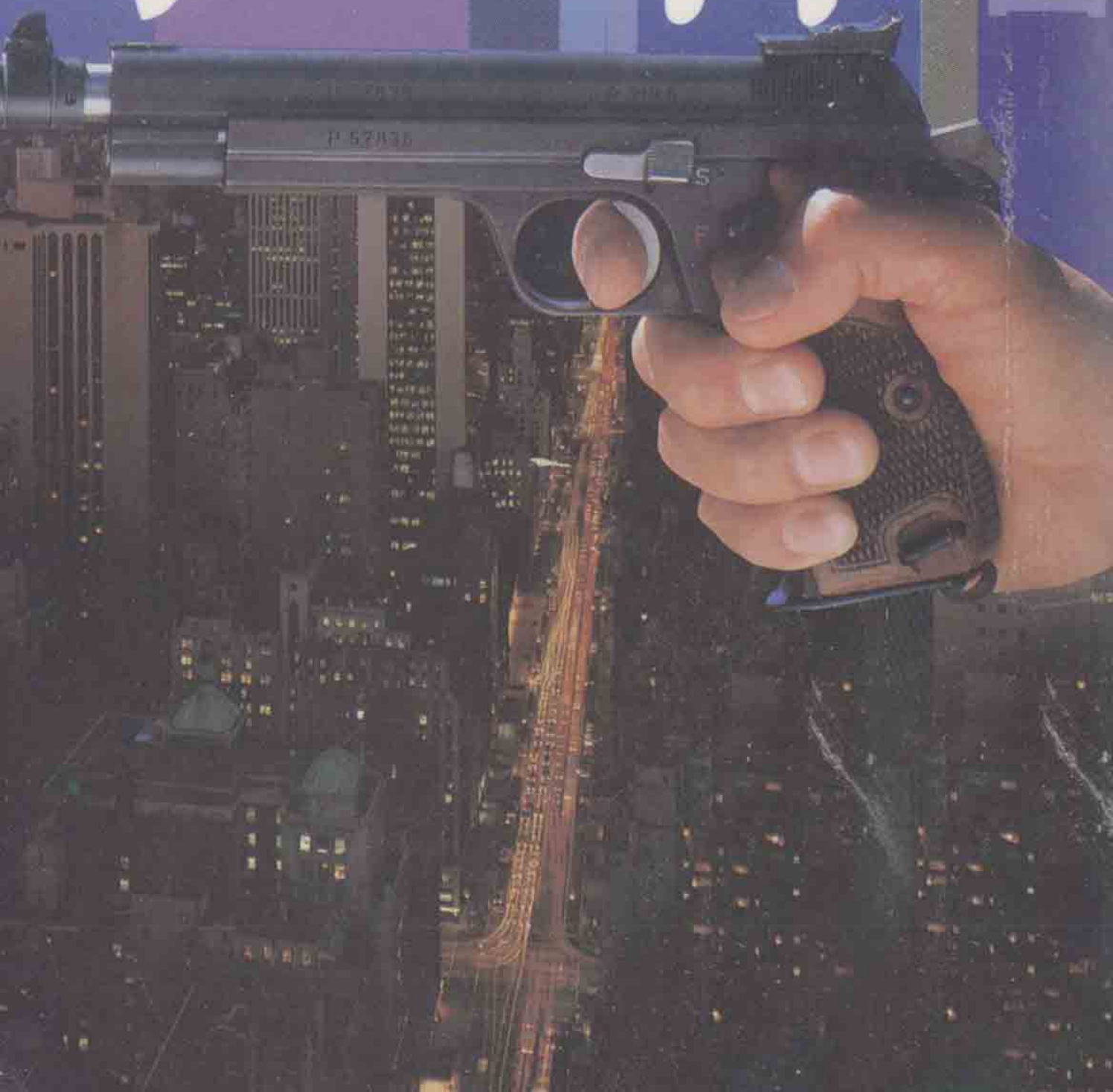


氷の森

Arimasa Ohsawa

大沢在昌



こおり もり
氷の森

おおさわありまさ
大沢在昌

© Arimasa Osawa 1992

1992年11月15日第1刷発行

1993年12月3日第4刷発行

発行者——野間佐和子

発行所——株式会社 講談社

東京都文京区音羽2-12-21 〒112-01

電話 出版部 (03) 5395-3510

販売部 (03) 5395-3626

製作部 (03) 5395-3615

Printed in Japan



講談社文庫

定価はカバーに
表示してあります

デザイン——菊地信義

製版——信毎書籍印刷株式会社

印刷——信毎書籍印刷株式会社

製本——株式会社千曲堂

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部あてにお送りください。
送料は小社負担にてお取替えします。なお、この本の内
容についてのお問い合わせは文庫出版部あてにお願いい
たします。

(庫)

ISBN4-06-185270-1

本書の無断複写(コピー)は著作権法上での例外を除き、禁じられています。

講談社文庫

氷の森

大沢在昌

講談社

目次

来訪者	7
影の貌	77
時の回廊	181
夢の果实	235
回想の海	277
暗黒の記憶	347
冷血の森	416
解説 関口苑生	479

氷の森

この作品は、一九八九年四月小社より
単行本刊行されたものです。

1 来訪者

その日はいろいろな出来事がおきていた。まず昼前に、撮影現場から失踪していた有名な映画俳優が死体で発見された。つづいて年末の交通渋滞の中で大規模な事故がたてつづけに発生し、深刻な交通の麻痺状態が首都圏をおおいつつあった。そして、午後の一時頃、強い地震が関東地方を襲い、それに拍車をかけた。

私はといえば、昼食から帰ってきて、事務所の床にガラス片が四散しているのを発見した。壁にかかっていた写真のパネルや絵画が落下し、鉢植えに額縁があたり割れたようだ。

それが必要としていたきっかけとなり、私は年末の大そうじを始めてしまおうと決めた。継続中の仕事はあったが、今は「待ち」の状態で、身動きがとれなかった。

そうじ機をかけている最中に電話が鳴った。出るまでに時間を要した。

ホースにつまずいて来客用の灰皿を倒してしまったのだ。週に一度、中味を捨てればいいほどしか吸い殻が溜まらない灰皿だった。

ひとりの依頼人の吸う煙草でこの灰皿がいっぱいになったことは、未だかつてない。

それでも自分の不手際を呪いながら、こぼれた吸い殻を拾い集めた。ふてぎわ
 ハイライトが二本、セブンスターが一本、フィルターにうつすらと口紅が残ったバージニアス
 リムが一本、だった。最後にこのソファで煙草を吸った女性は誰だっただろうと考えながら受話
 器をとった。

思いだせなかった。

「はい、緒方インヴェステイション」

「北村だよ。会うそうだ。今すぐ青山の本社に來い、と向こうはいつてる」

「サシか」

思ったより早い「待ち」の解除に、緊張を覚え、私はいった。

「どうかな。そこまでいえる立場じゃないからな。だがそう物騒なりゆきにはならんと思うが
 ね」

北村はのんびりとした口調でいった。仮りにその予想がちがったとしても、すまないと感じる
 ような男ではない。

「わかった。青山は例のところだな」

「そうだ、急げよ」

そう告げて北村は電話を切った。左手に吸い殻を握りしめたまま、私はデスクの上に腰をおろ
 した。

堀江みつきはこれで四日間、自宅に何の連絡もなく帰っていない。最後の消息は、これから会

はりえん

う男の息子と六本木のディスコを出ていく姿だった。堀江みつきの父親は与党の代議士で、みつきは父親が東京での住居として、マンションから女子大に通っている。

その父親に多額の政治献金をしているのがこれから会う男だった。不動産会社の社長と右翼団体の顧問を務めていて、背中にはきれいな絵が描かれているとの評判だ。

私は吸い殻を金属のクズ籠に払い落として立ちあがった。

バスルームでネクタイを締め直し、あげていたシャツの袖をおろした。コートは車の中に置きっぱなしだった。

私の事務所は六本木の七丁目、明治屋の裏を昔の竜土町方向におりていったビルの三階にある。五階建て、十室の小さなそのビルはファッションメーカーが二室、デザイン事務所が二室、広告制作プロダクションが三室、大家が二室を使っている。駐車場は、ビルの地下で道路からは一段低くなっている。

古いボルボのパンが普段の私の足だ。仕事では、幾台かの車をレンタル会社から借りて使うことが多い。

ボルボに乗りこみ、面倒くさげな唸り声に耳を傾けてやった。これを怠ると、途端にこいつはヘソを曲げる。

ぶつくさとはやきながら、ボルボは重い腰をあげた。行先は、ほんの数キロしか離れていない青山三丁目のビルである。

ビル全体の持ち主が、これから会うことになっている外岡秀雄だった。ビルの地下にある有料

駐車場に車を入れ、一階の受付で名乗った。

紺の制服に白いリボンをあしらった制服を着た清楚な娘が、エレベーターで十一階の役員応接室まで上がるよう指示した。エレベーターで昇りながら、彼女が、社長の背中に描かれた絵のことを知っているだろうか考えた。

知らないだろう。だが、どうということのない話だ。自分には関係ないと思うにちがいない。まさしくその通り、あなたには関係ない。ところで今夜、六本木の小さなビストロでうまい鴨でも食べないかね。そう、君と僕のふたりで。いや、別に考えこむことはない。酔ったら、私の事務所はすぐ近くだ。そこで休んでいけば――なに、下心は隠す気はない。本音だよ、本音でしか、私は生きないことにしている。

七階でエレベーターが止まり、扉が開いた。ゴマ塩頭を短く刈った、犀さいのような体つきの男が乗りこんできた。小さな眼は何の感情も混じえず、私を点検した。

身長一七四センチ、体重七十キロ、靴のサイズは二十六、ツイードのジャケットに白のシャツ、黒のコーデュロイパンツにネクタイをしている。時計は安物のデジタルで、靴もリーガル。バリーとタニノクリステイは年に二度くらいしかはかない。注意深く観察すれば左頬の下、顎の少し上にある傷跡に気づくだろう。カッターナイフで切られたあとだ。裸になれば、あとふたつ傷跡を見つけられる。

エレベーターが停止した。十一階だった。扉が開くと、にこやかな笑みを浮かべた長身の男が立っていた。爽やかな育ちのよさをふりまいている。慶応幼稚舎出身は三十五歳までなら、たい

ていその雰囲気を残しているものだ。

「お待ちしておりました。外岡の秘書で、中山と申します」

二十八、九、あるいは三十に手が届いているかもしれない。若く見えるタイプだ。国産車より外車、銀座よりも六本木が似合う男だ。

七階で乗ってきた男は無言で、歩きだした私たちのあとをついてきた。彼に六本木が似合うとは思えない。新宿歌舞伎町、池袋あたりがしっくりくる。玉虫色のスーツは、その彼には少し地味すぎると見たが、どうだろう。

中山の案内で、私は廊下の一番奥にある応接室に入った。七階の男も私と一緒に応接室に入った。中山にとっては、その男は透明人間だった。私に紹介することも、彼に頷くこともせず、私達をそこに残して立ち去った。

六畳ほどの、応接セットのみがおかれた部屋だった。ただし防音加工だけは完璧になされている。厚い壁の上に、防音材を重ねたようだ。中山が閉めていったドアも、まるで劇場のそれのように分厚く重かった。喉がはり裂けるほど叫んでも、廊下では囁き^{ささや}ていどにしか聞こえないだろう。

外岡産業の役員応接室がすべてこういう造りになっているとは思えない。ここは特別応接室と考えた方がよさそうだった。

壁には絵が一枚かかっていた。モジリアニのようだが、模写のように見えた。私は絵に近寄り、つぶさに検討した。

男は一人掛けのソファのひとつに腰をおろし、無言で私を見つめている。私は振りかえり、男にいった。

「絵は好きかね」

返事はなかった。

「この絵は、どうも本物らしくない。詳しいわけじゃないが、絵具の輝きが近代的すぎるんだな。どう思う？」

あいかわらず男は黙っていた。

「絵が本物かどうか確かめるのに一番いい方法は何だか知っているかい」
私は少し待ってつづけた。

「たとえばこの絵だ。モジリアニのようだが本物だろうか。もしそれが本物かどうかを、どうしてもこの場で知りたかったら、どうする？」

男はまるで私の声が聞こえないようだった。

「簡単な方法だ。こうやって——」

私は額縁を壁から外した。

「頂いていきます、というんだ。本物なら答はノーだ。贋物なら、どうぞ、とこってくる」
絵を戻した。

「な、簡単な方法だろ」

「くだらねえ野郎だ」

男がいった。本当にくだらなそうに聞こえるいい方だった。

「勉強したのにな」

私は肩をすくめた。

「すわってろ」

応接室のドアが開いた。五十がらみの、眼の下にどす黒い隈がある男が入ってきた。グレイのスリーピースを着け、白い髪にパンチパーマをかけている。

ドアを閉め、男の隣に腰をおろした。

「緒方というのはおまえか」

不愉快そうに私を見上げ、いった。

「外岡さんですか」

男はしんどそうにすわり直した。左手の中指に、青い石の入ったごつい指輪をしている。

「五分だ。話せ」

「簡単ですな。じゃあ申しあげます。御子息の秀志さんと出かけられたきり帰られないお嬢さんがいます。二十で女子大の二年生です。四日間、行方がわからない。それがたとえ御本人の意志だとしても、親には知りようがない。そこで私に調査を依頼された。親御さんは、あなたの御子息と一緒にいるのは御存知ない。知ったら心配をされるか、どうか、私にはわかりません。とにかく御子息と会わせて頂くか、お嬢さんに、一度自宅に帰られるよう、御子息の方から説得して頂きたいのです。お嬢さんの名前は、堀江みつき、議員の堀江氏の長女です」

外岡の眼の下の隈がびくびくと痙攣した。
やがていった。

「それだけか」

「それだけです。御返事が頂けるなら」

「秀志がどこにいるかなど、俺は知らん。連絡などつけようがない」

「捜してください」

「命令するのか、お前」

ゴマ塩頭がボスの顔をうかがった。ひと声で、私をくしゃくしゃにするといったげだ。

「お願い、です。子を持つ親として、堀江氏の気持は察せられると思いますが……」

「知ったことか」

外岡は吐きだした。

「堀江のような下らん陣笠が何を思おうと、関係ないな」

「堀江氏が議員であることは、この際、関係ありません。ただ捜索願いが出されるとなると、両家にとっていささか不名誉なことにはなりますが」

「だから何だ？」

外岡は立ちあがった。私を見おろす。

「お前のようなチンピラが考えることなど、お見通しだ。小遣いが稼ぎたいならくれてやる。失せろ」

ゴマ塩頭が上衣から封筒を出し、灰皿以外はなにものっていないテーブルにほうった。私はそれに手をつけず、外岡を見上げた。

「男と一緒に、どこかへのこのことについてしてしまう二十のお嬢さんに問題がなかったとはいません。しかし、女性です。非力で逆らえなかったのかもしれない——」

「お前、気をつけてものをいえよ。秀志が堀江の娘をさらったというのか」

「高校時代、御子息は、少々活発でらしたようですな」

外岡の顔色が変わった。外岡秀志は暴行傷害で二度、婦女暴行未遂で一度、補導をうけている。

「野郎……」

ゴマ塩頭が唸った。

「この上、御子息の経歴をよごしたくないとはお考えになりませんか」

ゴマ塩頭の手がのび、私のネクタイをつかんだ。私はひきよせられた。

「てめえ、現場で埋めてやろうか」

テーブルの上で顔をつきあわせ、ゴマ塩頭は凄んだ。

「やめろ桂崎、秀志には俺からいう」

私はネクタイをとり戻した。

「いつ、おっしゃっていただけますか」

「今夜か明日だ」